



Title	日本人の卑下的呈示行動に関する検討：発話者の身内を卑下する動機と聞き手の返答および印象
Author(s)	吉富, 千恵
Citation	対人社会心理学研究. 2011, 11, p. 81-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6159
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本人の卑下的呈示行動に関する検討 発話者の身内を卑下する動機と聞き手の返答および印象

吉富千恵(大阪大学大学院人間科学研究科)

本研究では、自己卑下呈示に関する既往の研究において行われている議論を、自分の身内のことを他者に対して卑下する身内卑下呈示の場合に拡張し、自己卑下呈示と身内卑下呈示の関係性について検討した。研究 1 においては、身内卑下呈示の生起動機と返答分類を行い、卑下内容を否定する反応が期待されることや、聞き手への話題提供の動機が高いことを示した。研究 2 においては、身内卑下呈示の受け手の印象評定に及ぼす身内卑下呈示内容と実際の技量との乖離の影響を検討した。その結果、卑下されるターゲットの技量が優れている場合は、より事実ではなく謙遜と受け止め、不快でなく感じるが、特に中年齢の女性では実際の技量を知らない場合、より事実と受け止め、不快に感じることが明らかになった。

キーワード: 自己卑下呈示、配偶者卑下呈示、受け手の返答、配偶者卑下動機

問題と目的

日本人の自己卑下呈示

日本人の自己卑下の傾向については文化的自己観 (Markus & Kitayama, 1991) や自己呈示の視点から多面的な研究が行われつつある。異文化間比較のみならず日本では、文化的自己観が日本人の卑下的呈示行動に及ぼす影響が相手によって異なることが指摘されている (守崎, 2002)。また、自己卑下呈示を自己高揚戦略として位置づけた研究や (吉田・黒川・浦, 2000)、集団の概念を加味することで自己卑下呈示が生じにくくなることを明らかにした研究がなされている (村本・山口, 2003)。いずれのアプローチにおいても、日本人が自己卑下呈示を場面や相手との関係性にに応じて使い分けることが指摘されている。また、発話者と受け手の相互作用としての側面に着目して、発話者の動機、受け手の認知などが検討されている (e.g. 吉田・浦・黒川, 2004)。吉田他 (2004) は自己卑下呈示の生起動機を検討し、自分に親しみをもって欲しいなど、関係希求動機が高く、自分自身の評価を高めるために行われていることを指摘している。また、卑下的呈示は、発話者と聞き手の相互行為としての側面に着目して理解する必要がある。この点に着目して吉田他 (2004) は、自己卑下に対する返答について検討し、卑下的発話に対し聞き手が卑下内容を否定する返答を行うというスクリプトの形成を指摘した。吉富 (2005) は、自己卑下呈示の認知に影響する要因として、卑下した内容に関する実際の技量情報や聞き手の年齢要因などを明らかにしている。

集団における自己卑下呈示

さらに近年、自己卑下の概念を集団に拡張した研究がなされている。村本・山口 (2003) は、自らの所属する集団の成功については卑下しないことを見出した。石黒・村上 (2007) は、相手との関係性と自己卑下の生起率に関する

検討を行い、配偶者に対しては自己卑下を行わないことを見いだしている。

一方、大野 (2006) は実際の謙遜表現の使用条件について検討し、自らのことのみならず、自らの配偶者のことを他者に謙遜する場合があることを指摘している。配偶者の謙遜に関連して吉富 (2007) は、30 代夫婦において配偶者のことを他者に卑下する場合の印象について検討し、自己卑下呈示との類似性を指摘する一方で卑下された女性がより不快に感じる傾向を見出している。日本人が自らの身内を卑下する行動は、実際の場面でよく見られるものの、卑下する動機や、自己卑下との関連に関する検討は十分になされていない。したがって本稿では、自己卑下呈示研究のアプローチを踏襲し身内卑下研究を進める。

本研究の目的

本研究では、同席の身内のことを他者に対して卑下する (以下、身内卑下呈示と呼ぶ) 場面に焦点を当て、身内卑下の基本的な特性の検討を目的とする。

身内卑下呈示の場合、身内を卑下する発話者、卑下された身内、身内卑下呈示の受け手の 3 者を検討する必要がある。まず自己卑下呈示に関しては、(1) 発話者の動機、(2) 受け手の返答分類、(3) 受け手の返答が発話者の自己評価に影響を与えることの 3 点が吉田他 (2004) によって検討されている。(3) と対応する身内卑下呈示の検討が吉富 (2007) により行われ、受け手から卑下内容を肯定する返答を受けた場合に、卑下された身内は不快に感じることが指摘された。これらの結果は、卑下の対象が本人であるか身内であるかの違いはあるものの、卑下の対象が受け手からの返答によってその不快度を変化させるという意味において類似していると言える。したがって、(1) 発話者の動機、(2) 受け手の返答分類についても、自己卑下で得られた知見と同様の結果が身内卑下呈示につ

いても導かれると推測される。この仮説を検証するために、研究1では、身内卑下呈示の発話者と受け手に着目した検討を行う。身内卑下呈示の発話者の動機について、質問紙を用いて動機因子を分析する。また、身内卑下呈示の受け手に関しては、その返答に着目した検討を行う。

吉富(2005)は、卑下の発話者の実際の技量が優れているという事実を受け手が知っているときと知らないときで、受け手が謙遜と受け取るか、事実と受け取るかの程度に差が生じることを年齢要因も含めて検討した。研究2では、自己卑下の受け手の印象を検討したこの研究に基づいて、身内卑下呈示の受け手の印象に関する研究を試みる。具体的には、身内卑下呈示の受け手の印象に影響する要因について、質問紙によるシナリオ実験を用いて検討する。シナリオ設定においては、身内として親子、兄弟、配偶者などさまざまな関係が考えられるが、発達の要因の影響を極力排除した結果を得るために、特に自分の配偶者を卑下する場合(以下、配偶者卑下と呼ぶ)を扱い、配偶者卑下の受け手の印象を検討する。

研究1

研究1では、身内卑下呈示への返答分類および身内卑下呈示の動機を明らかにする。

方法

予備調査として20代～60代の学生および大学教職員50名(平均年齢33.36歳, $SD = 13.61$)に対し、「身内のことを他者に対して謙遜するのはなぜか」について自由記述で回答を求め、得られた結果のカテゴリー分類を行った。その結果に、自己卑下呈示の生起動機に関して吉田他(2004)の用いた測定項目を合せて計26項目を設定した。

調査参加者 調査参加者は大学生、社会人、主婦などを含む、10代～70代の男女297名(男性135名、女性162名; 平均年齢31.18歳, $SD = 18.28$)であった(Table 1)。回答者を年齢により低年齢群(10代～20代)、中年群(30代～40代)、高年齢群(50代以上)と区分した。調査は質問紙法で行い、質問紙を郵送の上、1週間後に同封の返信用封筒で提出するよう求めた。320通配布し、回収率は93%であった。調査参加者の所属する組織の長を通じて回答を依頼したため、きわめて高い回収率となった。

身内卑下呈示動機に関する質問紙の構成 「以下のような理由であなたが身内のことを謙遜したことがどのくらいありますか?」と問い、作成された26項目に対して「全く当てはまる(1)」から「全く違う(5)」までの5件法で回答を求めた。

身内卑下呈示への回答に関する質問紙の構成 知人や友人に対して自分の身内を謙遜したときの相手の返答

に関して、「全く当てはまらない(1)」～「非常に当てはまる(5)」の5件法で回答を求めた。返答は、吉田他(2004)の分類を参考に以下の4つを設定した。身内についての卑下内容を否定する返答(そんなことないでしょ)、身内についての卑下内容を肯定する返答(そうなんですか)、相手も同じように身内を卑下するような返答(私の家内も下手ですよ)、特に返答しない。

Table 1 調査参加者の性別・年齢表

		回答者の性別		合計
		男	女	
年齢	低	51	82	133
	中	31	41	72
	高	53	39	92
合計		135	162	297

(低年齢 10代～20代、中年 30代～40代、高年齢 50代以上)

結果

身内卑下呈示動機 身内卑下呈示動機項目に対して主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値1以上の基準で以下の6因子が抽出された。第1因子:「反応期待動機因子」(「私が言ったことについて同情してほしい」など)、第2因子:「習慣動機因子」(「無難だから」など)、第3因子:「印象高揚動機因子」(「自分に親しみを感じてほしいから」など)、第4因子:「身内高揚動機因子」(「本当は身内が優れていることを示したい」など)、第5因子:「話題提供動機因子」(「その場の雰囲気をもたせたい」など)、第6因子:「謙虚動機因子」(「照れくさい」など)。各因子に含まれる項目はTable 2に示すとおりである。

各動機因子に負荷の高かった項目の得点の平均値を各因子の合成得点とし、因子合成得点に対して、動機(6因子) × 性別(男女) × 年代(低中高)の分散分析を行った結果、有意な交互作用はみられず、動機の主効果のみが有意であった($F(5,1455) = 131.56, p < .001$)。Bonferroniの方法による多重比較の結果、反応期待・身内高揚・習慣・印象高揚、話題提供・謙虚以外の関係に有意差がみられた($p < .01$)。実行頻度の高い動機から、話題提供動機、謙虚動機、習慣動機であり、実行頻度の低い動機としては、反応期待動機、自己高揚動機、印象高揚動機であった(Figure 1)。

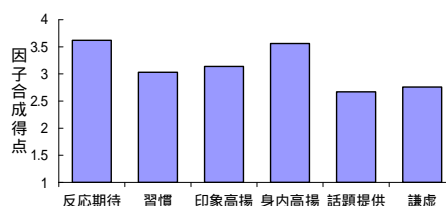


Figure 1 各動機因子の得点(1: 高 5: 低)

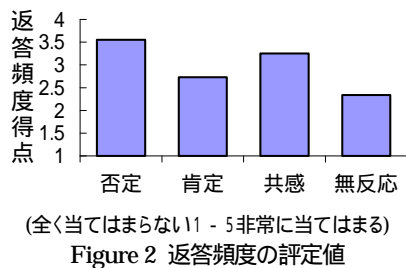
Table 2 身内卑下呈示動機の因子分析

項目	因子						共通性
	1	2	3	4	5	6	
私が言ったことについて同情してほしい	.82	.11	.11	.15	.06	.05	.71
私が言ったことについて、慰めてほしい	.81	.01	.09	.25	.00	.13	.78
相手の関心や興味をひきたい	.73	-.02	.31	.00	.24	-.09	.70
相手にそんなことないよ、といってほしい	.55	.10	-.01	.44	.20	.26	.61
相手の出方をうかがいたい	.53	.34	.14	.19	-.02	-.08	.46
身内のなかにおける自分の地位を示したいから	.45	.38	.18	.35	-.07	.04	.51
私が身内を卑下することを期待されているから	.42	.29	.16	.30	-.09	.19	.42
無難だから	.09	.77	.01	-.08	.14	.11	.63
習慣だから	.07	.68	.01	.07	.26	.17	.56
自己防衛のため	.21	.65	-.02	.24	.26	.03	.59
常識的な人だと思われたいから	.09	.64	.44	.22	-.15	.14	.69
身内よりも相手を立てたいから	.00	.49	.30	.05	.02	.33	.44
自分に親しみを感じてほしいから	.21	.06	.85	.05	.24	-.02	.84
自分が相手に親しみを持っていることを示したい	.13	.05	.79	.16	.19	.01	.70
自分を好ましく思ってもらいたいから	.25	.17	.76	.19	.12	.12	.73
本当は身内が優れていることを示したい	.27	-.06	.12	.77	.03	-.04	.68
他の人よりも身内が劣っていないと思われたい	.32	.12	.15	.66	-.08	.07	.59
身内との関係が良好なことを示したい	.01	.33	.07	.66	.32	-.09	.66
身内についてほかのよいところをいってほしいから	.56	.07	.12	.57	.07	.08	.66
その場の雰囲気や和ませたい	-.06	.09	.24	.10	.73	.15	.63
笑いをとるため	.18	.13	.01	-.01	.72	-.15	.59
人間関係を円滑にしたい	-.03	.17	.22	.16	.68	.32	.66
話題を提供したいから	.32	.13	.40	-.15	.56	-.22	.66
照れくさい	-.07	.05	.06	.13	.48	.67	.71
自慢したくない	.04	.19	-.08	-.06	-.04	.66	.48
恥ずかしいから	.29	.22	.17	.01	-.06	.51	.43
固有値	3.72	2.80	2.77	2.56	2.55	1.68	
寄与率(%)	14.34	25.10	35.73	45.59	55.40	61.86	

注) 信頼性係数: 第1因子 $\alpha = .84$ 、第2因子 $\alpha = .76$ 、第3因子 $\alpha = .86$ 、第4因子 $\alpha = .77$ 、第5因子 $\alpha = .74$ 、第6因子 $\alpha = .50$

身内卑下呈示への返答分類結果 返答ごとの平均点を Figure 2 に示す。返答(4)の分散分析を行った結果、返答に有意な主効果が認められた($F(3, 993)=125.5$, $p < .01$)。Bonferroni の方法により返答に関する多重比較を行った結果、否定反応、共感反応の頻度が多く、肯定反応、無反応の頻度が少ないことが有意に示された(p

$< .01$)。また「全く当てはまらない、当てはまらない」、を「当てはまらない」とし、「当てはまる、非常に当てはまる」を「当てはまる」としたとき、当てはまると答えた割合は、否定反応は 60.12%、肯定反応は 18.12%、共感反応は 44.71%、無反応は 6.04%であった。



考察

研究 1 においては、身内卑下呈示に対する返答と身内卑下呈示動機を検討した。自己卑下呈示に対する返答と自己卑下呈示動機に関する既往の研究成果(吉田他, 2004)と比較した結果、全体としては、身内卑下呈示と自己卑下呈示においておおむね対応した結果が得られ、自己卑下呈示、身内卑下呈示によらず、卑下的な発言に対して否定反応をするという日本人の一般的なスクリプトが確認された。身内卑下呈示については、否定反応を返すことが最も一般的であり、否定反応の回答率 60.12% は、自己卑下呈示に対する否定返答の回答率約 6 割の結果とよく対応している(吉田他, 2004)。

配偶者卑下呈示の動機因子に関しては、得られた 6 因子のうち身内高揚動機、反応期待動機、印象高揚動機、話題提供動機の 4 因子が自己卑下呈示の動機と対応している(吉田他, 2004)。また、身内卑下動機と自己卑下呈示動機の各因子の中でいずれも聞き手からの反応を期待する反応期待動機が低い点で類似した結果となっている。一見この結果は、発言者が受け手の返答を気にかけていないようにも解釈できるが、必ずしもそうではない。自己卑下を自己高揚戦略として捉える研究(吉田他, 2000, 2001)で指摘されているように、自己卑下呈示に対する聞き手の返答の違いが自己卑下呈示の発言動機にとって重要な要因である。すなわち、卑下的発言に対しては受け手からの否定反応が暗黙の前提であり、動機としては改めて意識されていないと考えられる。

一方、自己卑下呈示と身内卑下呈示との類似性がみられなかった点として、「話題提供因子」の実行頻度が挙げられる。自己卑下呈示においては 4 つの動機因子のうち、その場の雰囲気や和ませたいなどの話題提供動機の実行頻度は 3 番目と比較的低いのに対し(吉田他, 2004)、身内卑下呈示においては、話題提供動機が最も実行頻度の高い動機因子であり自己卑下の場合よりも強い動機として表れた。

研究 2

研究 2 では、配偶者卑下呈示の受け手の印象と卑下された配偶者の実際の技量情報の関連について検討する。

方法

質問紙法により、配偶者卑下呈示の会話文に対する印象に関する回答を求めた。

調査参加者 調査参加者は日本語母語話者で、10 代 70 代までの男女 143 名(男性 65 名、女性 78 名)であり、約 8 割が有配偶者であった。質問紙は 145 通配布し回収率は 98.62%であった。調査参加者の所属する組織の長を通じて回答を依頼したため、きわめて高い回収率となった。回答者を年齢により低年齢群(10 代 20 代)、中年年齢群(30 代 40 代)、高年齢群(50 代以上)と区分した(Table 3)。

質問紙の構成 配偶者卑下呈示発言を含む 3 つの会話文に関する質問に回答を求めた。会話の内容はいずれも「夫婦同席の場面で、夫婦の知人が夫婦のうち妻(ターゲット)を誉め、妻を誉められた夫が誉められた内容を否定する」といった内容である。3 つの話題は「夫婦喧嘩について」、「英会話について」、「試合について」である。回答者には 3 人の会話を第三者として聞いたときの認知に関して回答を求めた。

回答者に与える予備知識により 2 種類の質問紙を用意し、各調査協力者がいずれか一方の質問紙に回答するようにランダムに配布した。1 つの質問紙では、誉めた内容に関してターゲットが実際に優れているという情報を与え、もう 1 つの質問紙ではこのような情報を与えない。すなわち、予備知識を与えられた方の回答者にとって、「ターゲットが誉められた内容は事実であるにも拘らず、ターゲットの夫は誉められたことを否定した」ことになる。

Table 3 回答者の性別と年齢

	回答者性別		合計
	男	女	
年齢	低	26	37
	中	21	20
	高	18	21
合計	65	78	143

(低年齢 10 代 20 代、中年年齢 30 代 40 代、高年齢 50 代以上)

配偶者卑下的発言の認知に関する質問として、会話の不快感(「不快(1)」～「快(7)」の 7 件法)、夫の発言を本当だと思うか(「はい(1)」～「いいえ(5)」の 5 件法)、夫の返答を謙遜ととらえたか(「謙遜した(1)」「事実を述べた(2)」「その他(3)」(3)は分析から除外)、の 3 項目とした。

結果

各従属変数について、技量情報(優れている、不明) × 回答者の年齢(低中高) × 性別(男女)の分散分析を行った。各従属変数の評価値は 3 つの話題の平均値とした。

不快と思うかの評価値 Figure 3 に、技量情報、年齢、性別による不快度の評価値の変化を示す。分析の結果

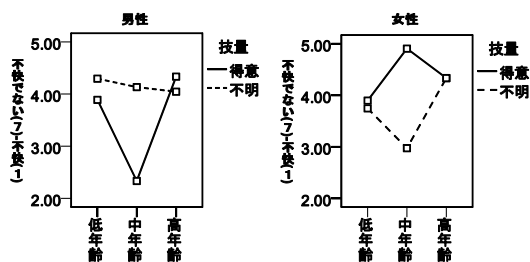


Figure 3 不快と思うかの評価値

性別 × 技量の交互作用 ($F(1, 142) = 5.79, p < .05$)、性別 × 年齢 × 技量の交互作用 ($F(2, 142) = 3.48, p < .05$) が有意に認められた。技量 × 年齢 × 性別の3要因の交互作用について単純交互作用検定を行い、中年齢における性別 × 技量 ($p < .001$)、女性における年齢 × 技量 ($p < .05$) の有意な単純交互作用がみられた。中年齢の各性別における技量の単純・単純主効果検定の結果、女性について技量の不明 < 得意 ($p < .001$) の有意差が認められた。中年齢の各技量における性別の単純・単純主効果検定の結果、得意技量の場合の男性 < 女性 ($p < .05$) と技量不明の場合の女性 < 男性 ($p < .01$) の有意差が認められた。女性の各技量における年齢の単純・単純主効果検定の結果、有意な単純・単純主効果がみられ ($p < .01$)、Bonferroni の方法による多重比較の結果、技量不明の場合の中年齢 < 高年齢 ($p < .01$) の有意差が認められた。低年齢と高年齢においては、技量情報の有無や性別によらず不快感はいずれもあまり変化しない一方、中年齢の女性は、情報が不明な場合に高年齢や男性と比べて不快に感じ、情報が得意な場合には男性と比べて不快に感じないことが分かった。

卑下内容を本当だと思うかの評価値 Figure 4 に、技量情報、年齢、性別による評価値の変化を示す。技量情報の主効果 ($F(1, 137) = 3.06, p < .10$)、技量情報 × 性別 × 年齢の交互作用 ($F(2, 137) = 2.48, p < .10$) の有意傾向が認められた。技量 × 年齢 × 性別の3要因の交互作用について単純交互作用検定を行い、中年齢における性別 × 技量 ($p < .01$)、技量情報不明の場合の性別 × 年齢 ($p < .05$) の有意な単純交互作用がみられた。中年齢の各性別における技量の単純・単純主効果検定の結果、女性について技量の不明 < 得意 ($p < .05$) の有意差が認められた。中年齢の各技量情報における性別の単純・単純主効果検定の結果、技量不明の場合に女性 < 男性 ($p < .05$) の有意差が認められた。技量情報不明の場合の各性別における年齢の単純・単純主効果検定の結果、有意な単純・単純主効果がみられ ($p < .05$)、Bonferroni の方法による多重比較の結果、女性について中年齢 < 高年齢 ($p < .05$) の有意差が認められた。低年齢と高年齢においては、技量情報の有無や性別によらず

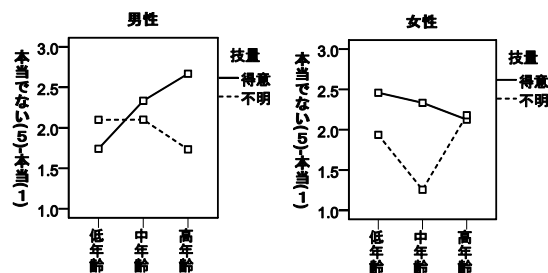


Figure 4 内容を本当と思うかの評価値

ず本当と思うかどうかはあまり変化しない一方、中年齢の女性は、技量が不明な場合に高年齢や男性と比べて本当と受け止めることが分かった。

内容を謙遜とらえたかの評価値 Figure 5 に、技量情報と年齢による評価値の変化を示す。技量情報の主効果 ($F(1, 62) = 9.24, p < .01$) が有意に認められた。技量が優れている場合には、年齢によらず謙遜と受け止めることが分かった。

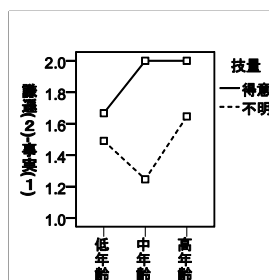


Figure 5 内容を謙遜と思うかの評価値

考察

配偶者卑下呈示の印象に対する技量情報の影響に関して検討した結果、卑下されるターゲットの技量が優れているという情報を受け手が知っている方が、知らない場合に比べて、事実ではなく謙遜と受け止めることが明らかとなった。この結果は、吉富(2005)の自己卑下呈示に対する受け手の印象の結果と同様であった。

受け手の年齢を加味すると、自己卑下呈示の場合は高年齢ほど実際の技量によらず自己卑下呈示を謙遜ととらえ、低年齢ほど事実と捉える傾向がみられ(吉富, 2005)、「実際の技量によらず自己卑下呈示が望ましい」とする規範と、「実際の技量に即した呈示が望ましい」とする2つの規範の存在が示唆されている。一方本稿での配偶者卑下呈示の印象に関する検討により、低年齢と高年齢において実際の技量を知っているかどうか、不快と思うか、本当と思うかといった印象に及ぼす影響は小さいのに対し、中年齢では男女差がみられ実際の技量を知らない場合に、女性は高年齢や男性と比べてより本当と受け止め不快に感じる結果が明らかになった。これらの結果から、配偶者卑下呈示についても自己卑下呈示と同様に、「実際の技量によらず配偶者卑下呈示が望ましい」とする規

範と、「配偶者の実際の技量に即した呈示が望ましい」とする2つの規範が存在すると考えられる。

総合考察

自己卑下呈示と身内卑下呈示を比較した場合、卑下動機や受け手の返答分類に関して、類似した知見を見出すことができた。その一方で、話題提供動機は、自己卑下呈示においては比較的弱い動機であるのに対し、身内卑下呈示においては比較的強い動機であることが見出された。このような自己卑下と身内卑下呈示の動機の違いは、複数観衆問題(Fleming, 1994)として解釈することもできる。すなわち、身内卑下呈示の発話者は、身内と聞き手との両者への配慮のジレンマに陥り、その葛藤の結果、聞き手への配慮を優先して身内卑下呈示を行うと考えられる。

身内の概念と関連する集団の観点から議論を進展させた、村本と山口の研究成果の内の1つに、親密な集団であれば、自己卑下と同様に内集団卑下も行われることを明らかにした研究がある(村本・山口, 2003)。具体的には、自分の成功を卑下的に語るのと同様に、家族集団の成功についても、集団卑下的に語る傾向が見出されている。彼らはその根拠として、心理的一体感ゆえに自己と内集団を同一視するためと理由づけている。

本研究も、内集団卑下を身内卑下呈示(配偶者卑下)と読み替えれば、身内卑下呈示(配偶者卑下)が生起するという点で、主張は同じである。また、彼らの研究では、発話者の自尊心が受け手のサポートによって維持されると発話者が推測できる関係性にあるときだけ、すなわち、自己卑下や内集団卑下を行っても、受け手に好意的に解釈されることによって自己や内集団を間接的に高められると推測できる限りにおいて、自己や内集団を卑下的に帰属することが示された。またその理由として村本・山口(2003)は、家族のような親密度が高く一体感のある内集団成員のfaceは自己のfaceと同等に扱われるため、他者に対して内集団の卑下が生じるとしている。faceとは、Goffman(1967)によって提唱された概念であり、日本における面子と類似した概念である。村本らの扱ったような、自分が含まれる内集団の成功の原因帰属場面では、他者に対して集団を卑下することは、自らのことを卑下することにほぼ直結するといえるが、本研究で扱ったような、誉められた人と卑下する人が異なる場面では、内集団他者の面子への配慮も必要になってくると考えられる。

この観点からすると、本論の研究2を含む一連の吉富(2005, 2007)の謙遜認知における研究において、受け手が謙遜と受け取るか否かに影響する主要因が実際の技量の優劣の情報であること、そして受け手の印象に男女で差があることを明らかにした点は重要である。すなわち

この結果は、受け手は身内卑下呈示をすべて「謙遜」とは受け取らず、その背景にある技量情報を無意識に照らし合わせて謙遜か否かを推論していること、さらには、男女で身内卑下呈示の受けとめ方に差があることを意味している。このことから、身内卑下を行う際には、第三者(受け手)だけでなく、卑下される身内の存在も考慮する必要があることを示唆している。

今回の身内卑下呈示に関する検討は、シナリオの場面設定として身内に卑下される身内がその場に同席している場面に限定した。笠置・大坊(2010)により指摘されているように、二者間会話場面において観察者が同席しているか否かによって、発話者の自己呈示が変化する可能性がある。したがって、卑下される身内が同席していない場合については身内への配慮が必要なくなり、より身内卑下呈示の程度が強まると予測されるため、このような要因の影響についても今後検討する必要がある。

参考文献

- Fleming, J. H. (1994). Multiple audience problems, tactical communication, and social interaction: A relational-regulation perspective. *Advance in Experimental Social Psychology*, 26, 215-292.
- Goffman, E. (1967). *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*. New York, Anchor Books, Doubleday & Company
- 石黒 格・村上史朗 (2007). 関係性が自己卑下の呈示に及ぼす効果 社会心理学研究, 23, 33-44.
- 笠置 遊・大坊郁夫 (2010). 複数観衆問題への対処行動としての補償的自己高揚呈示 心理学研究, 81, 26-34.
- Markus, H. R. & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 守崎誠一 (2002). 日本人とアメリカ人自己呈示行動 文化的自己観と個人主義/集団主義の影響 ヒューマン・コミュニケーション研究, 30, 45-67.
- 村本由紀子・山口 勸 (2003). “自己卑下”が消えるとき 内集団の関係性に応じた個人と集団の成功の語り方 心理学研究, 74, 253-262.
- 大野敬代 (2006). 謙遜表現の使用条件について 早稲田大学教育学部学術研究(国語・国文学編), 54, 2-35.
- 吉田綾乃・黒川正流・浦 光博 (2000). 自己高揚戦略としての自己卑下呈示 日本社会心理学会第64回大会発表論集, 204.
- 吉田綾乃・浦 光博 (2001). 自己卑下呈示における規範と実行ならびに他者反応が呈示者の適応に及ぼす影響 日本グループ・ダイナミクス学会第49回大会発表論文集, 64-65.
- 吉田綾乃・浦 光博・黒川正流 (2004). 日本人の自己卑下呈示に関する研究: 他者反応に注目して 社会心理学研究, 20, 144-151.
- 吉富千恵 (2005). 謙遜としての自己卑下の発話の認知 話し手の技量に関する情報と聞き手の年齢の影響の検討 国際文化学, 13, 93-110.
- 吉富千恵 (2007). 「配偶者卑下」に対する印象 30代男女間のくいちがいに関する一考察 国際文化学, 16, 61-74.

註

1) 研究2の質問紙における3つの場面を以下に示す。

夫婦喧嘩について

後輩: いつも仲良さそうでいいですね。夫婦喧嘩なんかめったにないでしょ?

夫: そうでもないよ。しょっちゅうケンカしてるよ。

後輩: えっ?ケンカすることあるんですか?奥さんいつも穏やかで素敵そうじゃないですか。怒った顔なんて想像つかないですよ。

夫: とんでもない、この人、外づらはいいけど、結構家の中ではがみがみ口うるさくて、怒ったら鬼みたいな顔になるよ。

後輩: 本当に?でもそんな激しいケンカはしないでしょ?

夫: するする。結構激しいケンカするよ。この人ケンカしたら皿投げてるよ。

妻: そんなことしたことないよ。それにケンカなんてそんなにしてないでしょ?

英会話について

後輩: 先輩達はよく海外旅行とか行かれるんですか?

夫: そうだね、二人とも旅行は好きだから結構行ったかな。

妻: そうね、アメリカとかイギリスとか行ったね。

後輩: そうか、奥さん英語ペラペラでしたもんね。本当にもう知的で美人な奥さんで先輩もご自慢ですよ。

夫: でも英語ペラペラって言っても、結構通じてなかったよ。何回も聞き返されてたし、あんなのイカサマ英語だよ。

妻: 良く言うわ。私が全部通訳してて、聞き返されてたのはあなたでしょ?

試合について

後輩: 先輩達、この前のダンスの競技会も優勝されたんですって?いつもすごいですよね

夫: いや、たまたま運がよかっただけ。

後輩: 違いますよ。運じゃなくて、奥さんが美人でダンスが上手だからですよ。奥さんのお陰でいつも優勝できてるんですって。

夫: いや、違う違う。この人本番になったらめちゃくちゃ緊張して、足は間違ふしよるめくし、こっちは支えるので大変で。奥さんのお陰どころか足を引っ張られてるよ。

妻: ひどいなあ、私もちゃんと踊ってたよ。足型だって本番やったらそんな間違っていないと思うけどなあ。

Investigation of Japanese self-effacement:

The speaker's motive of spouse-effacement and receiver's impression and reply

Chie YOSHITOMI (Graduate School of Human Science, Osaka University)

In this paper, a new concept of spouse-effacement is examined based on some questionnaires. As often seen in Japanese daily communication, Japanese people present with humility not only themselves but also their family, i.e. a spouse, child, relatives and so on. The self-effacement of Japanese people is well known and has been examined so far. However, spouse-effacement has not been studied sufficiently. The motive for spouse-effacement is examined using factor analysis. The response to spouse-effacement is examined using categorical analysis. The impression of spouse-effacement is examined compared with self-effacement using variance analysis with variables, i.e. age, sex, knowledge, personality and so on.

Keywords: self-effacement, spouse-effacement, reply of receiver, motive of spouse-effacement.